

叔母さん二人は

キモオタニートの俺の

デカチンポに完堕ち済

（息子娘の目の前でケダモノファック

オンザビーチ）

犬文庫 027

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

登場人物

山田 則夫（やまだ のりお）

二十八歳。キモオタニート。ひきこもり。不潔なボサボサの長髪。ガリガリ。

高嶋 素子（たかしま もとこ）

三姉妹の次女。四十四歳。黒髪ショートヘア。男勝りの強気な性格。ももとりりの母。

白鳥 弓子（しらとり ゆみこ）

三姉妹の三女。四十歳。明るい茶髪のナチュラルボブ。眼鏡。高学歴の知的な女性だが、案外気が強い。忠助の母。

山田 理子（やまだ りこ）

三姉妹の長女。四十八歳。則夫の母。黒髪ロ

ングヘア―。則夫のことでとても疲れ、老けている。

高嶋 もも（たかしま もも）

素子の娘。長女。しっかり者。お姉ちゃんぶる。

高嶋 りり（たかしま りり）

素子の娘。次女。無口だが、独特の頑固さがある。

白鳥 忠助（しらとり ただすけ）

弓子の一人息子。気が小さく、大人しい。

その三姉妹は、大変仲が良かった。昔から、喧嘩らしい喧嘩などしたことがないくらいである。それは、三人がそれぞれ結婚して姓を変えて家庭を設けた後も、なんら変わることもなかった。長女理子の家では、頻繁に姉妹たちによるホームパーティーが開かれていた。三人とも専業主婦で、時間に余裕がある妻たちは、各々の息子娘を連れて、長女の家が集まった。もつとも、ホームパーティーといっても、それほど大それたものではない。廉価なお菓子を持ち寄り、品の良い紅茶を味わう程度のものである。だが、少しだけ優雅なその一時が、日々の激務に疲れた主婦たちの心を、癒してくれるのだった。

「あ、ダメだよ、りり！順番はちゃんと守らなくっちゃ！今は忠助（ただすけ）くんの番だよ！りりはさつき間違ったでしょ？」

「うう」

「はい、りりはちよつとストップ！ほら、忠助くんも、ボーつとしてないで早く選んでよ！次はももの順番なんだから！もも、待ってるんだからね！」

「あ…ご…ごめんなさい…い…今…やります…えつと…」

女の子二人と男の子一人が、リビングの絨毯にランプを広げ、神経衰弱で遊んでいた。

「ははは、もものやつ、すっかりお姉ちゃんぶりやがって…」

その様子を少し離れたダイニングのテーブルから眺めつつ、黒髪ショートヘアーの、気の強そうな女性が微笑を浮かべる。高嶋素子。十四歳。三姉妹の次女で、二人の女の子、高嶋ももと高嶋りりの母親である。素子はその見た目のイメージ通りの豪放磊落な女性で、めっぽ

う強気で男勝り。言葉遣いも非常に荒く汚く、建築会社に勤める年下の夫を完全に尻に敷いている感は否めなかった。それでも彼女が主導して形成する家庭の空気はすこぶる明るく、高嶋家には毎日笑いが絶えない。

長女のももは、そんな母親に似たしつかり者に育っているようだった。母親たちに連れられたホームパーティーにて三人で遊ぶ際、ももはなにかと仕切りたがった。積極的な素子の遺伝子を継いでいるぽかった。それに反して次女のリりは非常に大人しく滅多に口を開かないが、この娘はこの娘で独特の頑固さのようなものを備えており、一本筋が通っているような感じで、素子は全く心配していなかった。

「ふふふ、いいじゃない。あなたに似て頼りになるお姉さんになりそう」

冗談めかした感じで、向かいの椅子に掛けた

三女の弓子が素子に言う。

「ええ、そうか？」

「うん。いいのよ、お姉ちゃんはこのくらいで。ぐいぐい引っ張っていつてくれる方が妹としては助かるもの。末っ子の私が言うんだから間違いないでしょ？」

「うん、まあそういうもんかね」

「そうよ。ももちゃん、将来はあなたに似た豪傑になりそう（笑）。あはは」

「もう、なんだよそれ」

「ふふふ：うちの忠助も：ももちゃんを見習ってもう少ししっかりしてほしいものよね：まあ優しくして良い子なんだけど：あの人に似たのね、きつと」

弓子は愚痴っぽく呟いたが、その表情は決して暗いものではなかった。夫にも息子にも、実のところとても満足している。そんな幸せが滲

み出た顔だった。

白鳥弓子。四十歳。高嶋ももにやや恐縮しつつ神経衰弱に挑む白鳥忠助の母親である。明るいブラウン系のカラーを入れたさっぱりしたストレートのナチュラルボブヘアで、知的な眼鏡をかけている。三姉妹の中で一番高学歴の才女で、結構有名な大学を出ていた。夫はIT関連の企業に勤め、男としてやや頼りないところもあるが、三人の夫の中では一番の高収入である。

あらゆる意味で社会の成功者といえる弓子は、そんなわけでも上品で優雅な女性に違いなかったが、案外素子と同じような勝気な性質を有しており、夫と口論になった時などは鋭い弁舌で怯むことなく挑み堂々責め立てた。高収入の夫を影から支える専業主婦ではあるが、決して守られるだけの弱い存在ではない、人

としての揺るがし難い強靱さとエネルギーを備えた女性だった。

「まあいいじゃない、あなたたちのところは。とても健全に：当たり前前に育ってくれてるんだから：それにひきかえ：うちの子ときたら：はあ：」

最後に口を開いたのは、この家の住人でもある三姉妹の長女。山田理子、四十八歳である。シンプルな黒髪ロングヘアの、なんの変哲もない一般的な四十代の主婦だが、素子や弓子に比べて、その顔はやけに老けて見えた。それは単純な年齢差の問題も無論あるが、内心の気苦勞によって形作られた部分も否めなかった。

「はあ：なんであんな風になっちゃったのかしらねえ：あの子は：」

冗談めかした自虐口調ではあるが、決して虚偽ではない悲痛極まる母親の嘆き。それに対し

て。

「ホントにねえ…いつまであんな感じにいるつもりなのかねえ、あいつ…」

「ホントホント。でも姉さんのせいじゃないわよ。責任感することなんてないから。あんなのあいつ自身の問題でしかないんだから。あのロクデナシのね」

素子も弓子も、この上なく辛辣な口調で理子の子を評した。姉妹といえども、一応よその家の話である。本来ならいくらなんでもここまで不躰な言い方は憚られるはずだ。だが二人の口調には一切の遠慮がなかった。

その理由の一つは、二人とその人物の間これまで積み上げてきたとても親しい関係があり、気を使う必要などないということ。

そしてもう一つの理由は、その人物が、それくらい言っても全然いいくらいに、本当に酷い

ということだった…。

「はあ…」

長女の理子は深いため息をつき、ダイニングテーブルのティーカップに手を伸ばした。荒んだ気持ちを落ち着かせるように紅茶を喉に流す。

「……はあ」

「……はあ」

次女の素子と三女の弓子も、つられたように長女と同様のため息を漏らしたのだった。

丁度その時。

「…おはよお。ジュースちようだあ。ふわあ。あ。よく寝たあ。」

件の人物が二階から下りてきて、リビングに入ってきたのだった。山田則夫。二十八歳。山田理子の一人息子。いい歳して実家暮らしで平然と親の脛をかじりまくる、絶賛無職のニート

である。

不潔極まるボサボサの長髪と、不健康なガリガリの体。おまけにアニメとネットが大好物のキモオタで、就職活動など全くせず、人生になんのプランもないままずっと部屋にひきこもっている。部屋でしていることといえばアニメ鑑賞かネットかオナニーくらいのものだ。それでいてなんら罪悪感も焦燥感も抱えているようには見えず、妙に呑気で底抜けに明るいものだから、周囲の憤慨は並々ならぬものがある。「あ、素子おばさん、弓子おばさん。いらっしやい。ももちゃん、りりちゃん。忠助くんもここにちはあ〜」

則夫はいつもの気の抜けた感じで挨拶をした。自分の立場が全く分かっていない無邪気さでもって。

「こんにちは、則夫お兄ちゃん」

トランプで遊ぶ三人の中で、しつかり者のももだけが律儀に挨拶を返す。りりと忠助は、則夫という存在のただならぬ不穏さを感じ取っているのだろうか。いつも彼に対して見て見ぬ振りのような素知らぬ態度だった。

「はい、こんにちはあ。ふああ。あゝまだ寝足りないなあ。ふあ。ジュース、ジュース、甘くておいちいオレンジジュースと…」

則夫はリビングを通り抜け、母たちがいる地続きのダイニングへ進んでくる。ジュースがしまつてある冷蔵庫目指して…。なんでこんなに呑気なのだろう。毎日親の金で飯を食わせてもらっているというのに。理子は我が子に沸々とした怒りを覚えた。朝からこの態度には、さすがになにか一言言ってやらなければ気が済まない。

だが、それを最初に表明したのは、母親であ

る理子ではなかった。

「こら、則夫！お前今何時だと思ってるんだ！いつまで寝てんだよ！」

「そうよ！っていうかホントなに考えてるわけ、あんた！毎日毎日当たり前のように呑気に家において！恥ずかしくもないの？もうあんたはいい歳した大人なのよ！ねえ、どうなのよ！答えてみなさいよ！」

素子が、そして弓子が、則夫に対して立て続けに大声で叫んだのだった。いつの間にか二人はダイニングテーブルから立ち上がっていた。

「お、おばさん…ひ…ひい…」

二人はまるで仁王と化し、腕組みして則夫に迫っていく。その表情に猛々しい怒りの炎を燃やして。

「なあ、お前一体いつまでそんな生活してるつもりなんだよ！そんなのが永遠に通用するわ

けなんてないだろうがよ！アホだろ、お前！いい加減にしろよ！」

「ホントありえない！アホ！アホすぎる！アホすぎるのよ、あんたは！わかってる？自分がどれだけ愚かなことをしてるのか？自分がどれだけアホな人間なのかわかってるの、あんた？ほら、なんとか言ってみなさいよ、このアホ！アホ則夫！」

叔母と甥の間柄とは思えないほどに無遠慮で手厳しい苛烈な言葉だった。素子は強気な彼女らしい男っぽい攻撃口調で、弓子はインテリが滲み出た見下すような口調で、それぞれ烈火の如く則夫を罵った。母親姉妹が昔から仲が良かったため付き合いも長く、両者の間にはなんでも言い合える気の置けない関係の下地がしっかりと出来ていた。だがそれにしたって、二人の叔母がこの甥にここまで直情的な怒りをぶつ

けてくることは滅多になかった。

きつと二人の中にも親類として積もりに積もった不満があり、それがさっきの則夫の呑気な仕草で爆発してしまったのだろう。

則夫は。

「こ…怖い…叔母さんたち…怖いよ…やめてよ…助けて…」

両腕で頭を抱えて身を守るようにした。当人は切実に怯えているだけでそんなつもりは毛頭ないのだが、まるでふざけて馬鹿にしているようにも映る態度。それがまた叔母たちの神経を逆撫でする。

「なにふざけてんだよ！なめてんのかよ、てめえ！ああん！」

「あんた、アホの分際で叔母さんたちをコケにするつもり？」

「はう、そ、そんなことないです…ふ…ふざけ

てなんてないです…はう…ご…ごめんなさい…」

「まったく…っていうかお前！なんか汚ねえなあ！ちゃんと風呂入ってんのかよ！」

「ああ…いえ…昨日は…その…入ってません…その…今クールの新作アニメを消化するのに忙しくて…ごめんなさい…」

「なにしてんのよ！このアホ！どこまで恥づかしいのよ、あんたは！」

怒りをぶちまけながら、弓子はふと視線を感じた。見ると、息子たちが、神経衰弱で遊ぶ手を止め、怯えるような表情でリビングからこちらに視線を送っていた。変貌したそれぞれの母親の姿に、心底驚いているようだった。

これ以上息子たちになんなものを見せるのは教育上よろしくない。弓子は萎縮した則夫に言う。

「ちよつと今からあんたの部屋に行つて、そつちでみつちり説教してあげるわ。どうせ掃除もしてないんでしょ？要らないもの全部捨ててあげるから」

「いいな、それ！あたしらがお前の根性を叩き直してやるよ！」

素子も賛同する。

「そ…そんな…」

「いいわよね、姉さん」

「うん…お願いしていいかしら。この子、私がいくら言つても聞かないから…二人で説得してほしい…これからのこととかも…」

「そんな…お母さん…」

則夫の頼みの綱の母親も、あつさり弓子の提案を了承したのだった。

「よし、決まりだな！おら行くぞ、則夫！」

「とつと来なさい！このアホ！」

「ひ…ひい…」

則夫は荒ぶる二人の叔母に連行され、二階の自室へと戻っていった。

「……………」

理子は期待を胸にその様子を眺めていた。二人の叔母とのやり取りで、息子の中のなにかが変わってほしい。そう願わずにはいられなかった。

※※※

三人は則夫の部屋にやって来た。三人とも入り、ドアが閉められる。部屋の中は、案の定散らかりに散らかっていた。アニメグッズやフィギュア。エロDVDもいっぱいある。そしてゴ

ミだらけだ。

「はあくホントに全然掃除してないのね、このアホ！」

「マジ呆れちまうよな、こいつはもう！」

「……………」

則夫と叔母二人は、部屋に入った流れのまま、その場で向き合って立っていた。今にもさっきの説教の続きが始まりそうな雰囲気である。

だが。

則夫は意外な行動を取った。

『パンツ』

と、大きな破裂音が響いた。なんのことはない。則夫が、いきなり両手を派手に叩いたのだ。すると……。

「……………」

「……………」

素子と弓子は、その態度を一変させた。つい

一瞬前まで派手に怒りを逆巻かせていたのに、突然無表情になり、だらんと両腕を垂らすような無気力な姿勢になったのだ。

だが、断じて催眠術の類などではない。素子も弓子も、自分の意思でそうしている。今、則夫の手が叩かれたのを、明確な合図として…。

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。さつきまで饒舌に甥を罵倒していたのに、素子も弓子もなにも言わない。ただ虚ろな目をして棒立ちしている。自らの意思で…。異様だった。不気味な空気が部屋に満ちた。

「…ふふっ」

則夫が、余裕溢れる笑みをこぼす。彼の表情もまた、さつきまでとは一変していた。怒れる叔母たちに縮こまっていた気弱なオタクの感

じはまるで消え失せ、むしろ反対に見下すような尊大な視線で二人を見つめていた。

そして。

彼は言った。

「……はい。脱衣♪」

いきなり。軽い口調で。叔母に対して。年長の親類縁者に対して。敬うべき人たちに対して。ありえないことだった。絶対にしてはならないことだった。

だが。

「おつけえ〜則夫さまあ〜♥素子、今すぐ脱いじやう〜♥」

「はあ〜い、ご主人さまあ〜♥弓子も脱いじやいまあ〜す♥」

素子も弓子も、さらにありえない、さらに絶対にしてはならない返答をして、則夫の言葉に従ったのだった。

二人の叔母は、その場で服を脱いでいった。それもただの脱衣ではなかった。コミカルに踊るように。くねくねと体を揺らしながら。妻であり母であるはずの二人が、甥の則夫の前で、バカ丸出しで楽しそうに脱衣していったのだった。

「ふふふ…」

則夫は満足そうにその様子を眺める。その表情のどこにも、さっきまでの愚かで弱々しいひきこもりニートの色はなかった。

「あはは！本当に着てたんだね。僕の命令通り」
♪

続けてやや感心したように則夫は言った。二人の叔母の服の下に現れたものに対してだった。彼女たちは、卑猥極まる全身網タイツを着用していたのだった。そしてその関係上、下着はブラもパンツも付けていなかった。

細かな黒い網の目に艶やかに彩られた四十代の熟れた肉体が、則夫の前に晒されていた。二人とも絶妙にムチムチだが、無駄な贅肉がついているという感じではない、四十代の女性らしい丁度良い熟れ具合の肉体といえた。二人は甥の視線から、それを一切隠そうとしなかった。姉妹二人揃って魅惑的なほどに豊満な乳房も、年相応の濃さに色づいた乳輪と乳首も、婉曲な淫猥さを纏う網の目の下に、全て見られるがまま丸出しにしていた。そして彼女たちが着用する全身網タイツは、クレイジーなことに股間の部分だけが網もなにもなく大きく穴が開いており、年季の入った二つの女性器がモロに剥き出しになっていた。二人の叔母は、やはりそのしなびた花びらも甥の目の前に堂々晒していた。

手首から足の爪先までが網目模様で覆われ

たこのいやらしすぎる姿を隠蔽するためにも、もう夏も近く蒸し暑いというのに、二人はわざわざ長袖長ズボンにソックスという嚴重スタイルで今日やって来たのだった。さつきも和氣藹々とホームパーティーを楽しみながら、息子娘がすぐ近くにいるというのに、彼女たちは服の下にこんなスケベな衣装を着けて平然としていたのである。そして当たり前前の母親の顔で、お互いの息子娘の成長を穏やかに確認していたのである。さらに親に迷惑をかける則夫に対して、もつともらしい大人の意見を連ねて説教していたのである。

服の下に変態の姿を隠して……。ブラもパンツも付けないで……。

「にやはは！じゃあ早速いつものやってえ〜♪せーのっ、はい！」

普段の彼のままの軽い調子で、則夫は二人の

叔母になにやら指示する。すると。

「はあ〜い♪ん…べろお〜えんろお〜」

「ああ〜ん♪えろれろお〜べんろべんろえんろお〜♪」

素子も弓子も、とんでもないことをしてみせたのだった。二人揃って大きく股を開いたガニ股立ちになり、両手で嬉しそうにダブルピース。さらに気が狂ったみたいに派手に白目を剥き、大きく舌を出してそれをベロベロと無茶苦茶に暴れさせる。加えて腰を回転させ、穴が開いて丸出しになった女性器を前後にへこへここと動かしてみせる。

異様な光景だった。まるで地獄の一ページのようでもあった。まともな大人が、少なくとも人の母が見せていい姿では決してなかった。

「にやはは！いつ見てもいいねえ〜。絶景かな

絶景かな♪」

則夫は愉快そうに笑う。

「べんろお〜えろえろお〜…はあ♥ありがとう
うございまあす、則夫さまあ♥」

「あああん♥えろえろべろべろお〜♥私
たち、ご主人様に喜んで頂くために、いっぱい
舌ベロベロ♪腰ふりふり♪やっちゃいまあ〜
っす♥ああん、べろべろえんろえんろお〜♥」

「にひひ、すげえ…やっぱこの叔母さんたちマ
ジすげえ…にしても、改めて見ると、とんでも
ないことしてるよね、叔母さんたち。ふふふ。
っていうか、めっちゃアホだよね。死ぬほどア
ホだよね、その姿（笑）。そんなこと、絶対ア
ホ以外しないよね」

「えろえろお〜べんろえんろお〜」

「あああん♥えろえろれろれろお〜」

さっきの仕返しというわけでもないだろう

が、則夫は実の叔母たちの姿を痛烈に酷評した。

だが、二人の叔母の舌と間抜けな下半身の動きは止まらない。まるで緩むことがない。ベロベロと、へこへここと、醜く、確実に動き続ける。

「ねえ、弓子。君、さっき僕のことアホだアホだって散々罵ってくれたよね？でもそういう君はどうなのさ？僕からは今の君の姿がとんでもなくアホに見えるんだけど。どうなの？弓子はアホなの？」

「はああん♥ああ、べろべろ！えろえろえろ！ああ、アホですう！んん！弓子は超アホです！弓子！もう超アホアホアホアホ女ですうう♥ううん！えろえろべろべろべろべろ！」

「ふふ、どの辺が？どの辺りがアホなのかちゃんと説明してよ。じやなきや僕わかんないよ？」

「はあ、ああ！べろべろ！れろれろえんろお〜！ああ♥こうやって、んん、全身ドスケベ網タイツ姿で、はあ♥ダブルピース舌べろべろ腰

ふりふりアホアホ体操しちゃうところが！ああん！弓子！アホだと思えます！そういうところが！ああ♥べろべろ！弓子！自分で自分がアホだと思えます！ああん♥」

「にひひ、忠助くんのお母さんはアホなんだね？」

「はあ、はいいい！ああ、アホですう♥忠助のお母さんはアホです！全身網タイツアホアホお母さんですう♥」

「じゃあそれを忠助くんに教えてあげよう！GO！」

「ああ！はあ♥忠助！ああ、お母さんアホです！忠助のお母さんはクソアホです！クソアホだから今、ああ♥えろえろ！お母さん、マンコ丸出し全身網タイツ着てアホアホドスケベ体操してます！んん！忠助がいる同じ家でしてます！アホだから！お母さんアホだから平

気でエロエロアホアホ運動してます！あああ
あん♥忠助え〜♪そおーれ！えろえろえろえ
ろ！べろべろべろべろ！ああん！腰！腰！腰
腰腰！ふりふりふりふりふり！」

「ぎやははは！最高〜♪：じゃあ素子！君
は？君はどうなの？アホなの？」

「はああん♥そんなの勿論：アホよお〜
ん！ももとりりの頼りになる強いお母さんの
素子は！もう大アホよお〜ん！大アホ！大
アホ！アイアム大アホ！いえ〜い！んん！
べろべろべろべろ！腰へこへこへこへ
こ！」

「にやはは！いいねえ！その素子のいつもの
勝気な感じを残したまま僕の言いなり人形に
なるのマジいいよ♪その調子で続けて。まあ、
そりゃあ素子はアホだよ。なんせ僕と：不倫
しちやっってるんだもんね？」

「はあああん！ああ♥そう！そうそうそう！不倫！不倫しちゃってる！素子アホだから！はあ！もうどうしようもない超絶アホだから！クソアホ女だから！えろれろっ！甥っ子とガッツリ不倫しまくっちゃってるう♥不倫キメまくっちゃってる♥あん、んん、べろべろべろべろべんろお〜」

「素子、僕が思うにね、不倫ってアホな人しかないんじゃないかな？だってそうじゃない？家族を裏切って家族に隠れてマンコを気持ち良くしちやう不倫なんて、普通アホしかないじゃん。どうかな？」

「はううん！ああ、そう！その通り！正にその通り！おお！ああ、不倫はアホの専売特許！不倫はアホの代名詞！んん！べろべろえろえろ！ああ♥だから！素子はアホだから、ああ！だから平気で不倫したぜえ〜！素子！堂々ガ

ツツリ不倫してやったぜえい！どうだ！ざまあみろ！あはははは！いえーい！

「いやあく色んなアホな不倫行為したよね？家族を裏切ってさ（笑）。そうだよね、素子？いっぱいアホアホ不倫したよね、僕たち？」

「べろべろえんろえんろべんろおく♡ああ、うん！うんうんうん！した！したしたした！しまくった！もうしまくった！ああん♡べろべろ！あたし！旦那と娘たちを裏切って則夫様とアホアホ不倫しまくった！ああん！」

「楽しかったよね？アホアホ不倫楽しかったよね？」

「はあうん♡ああ！うん！れろれろべろんべろおくくん！あたし！ああ♡アホアホ不倫めっちゃ楽しかった！家族を裏切る超アホなアホアホ不倫マジで楽しくて楽しくてしようがなかった！ああ！アホアホ不倫最高！あた

し！アホアホ不倫大好き！はあ！ぴーすぴーす！いえーい！

「ひひ、弓子は？弓子はどうなの？弓子はアホアホ不倫好きなの？」

「はあああん♥好きです！大好きです！弓子も！あああん♥べろべろべんろお〜！べんろお〜！弓子もアホアホ不倫が大大大大好きですう！んんん！」

「じゃあそれを家族に言え！二人とも愛する家族に向けてちゃんと言うんだ！ほらいけ！」

「ああ！あなた！ごめんなさい！弓子！不倫してます！あなたもよく知る甥っ子の則夫ちゃんとかアホアホ不倫してます！ああん、べろべろ！弓子はアホアホ不倫が大好きですう！」

「はあああん！ああ♥あんた！ああ、ごめんなあ！あたし！あたし！アホアホ不倫してんだ！もうめっちゃしてんだ！めっちゃアホに

なつてアホアホ不倫しまくつてんだ！ああ！
あたし！アホアホ不倫が大好きなんだわああ
あ！ああ！えろえろれろれろ！」

「ほら、もっと！しっかり白目剥いて！アへ顔
決めて！しっかり舌動かしてダブルピースも
強調して！そんでアホアホ腰振りも全力で続
けて！息子や娘にも報告！」

「ああ！忠助！ごめんなさい！お母さん！ア
ホアホ不倫が大好きなの！あああん♥ぴーす
ぴーす！ああ！あへあへあっへえ〜♥ん
ん！忠助！お母さんはアホアホ不倫が大好き
い〜♥いんええ〜い！べんろお〜、はあん！
ぴーすぴーす♥べんろお〜！」

「はあ！えろえろえろえろ！れろれろれろれ
ろ！ああ！もも！りり！お母さん！アホアホ
不倫が大好物！あへえ！あへあへ〜！はあ♥
アホアホ不倫なしではもう生きていけなあ〜

は、とても思えない。これを笑わずにいられようか。

これが、則夫と叔母二人との、真実の関係だった。

「にやはは！もうはつきりしたよね。僕と叔母さんたちと、どっちがアホなのか。どうなの？どっちがアホなの？答えてよ」

「ああ！はううん！べろべろ！ああ、あたしたち！あたしたちよおお！アホはあたしたちよおお！あたしたちなよおお！」

「えんろお〜！ああ！私たち叔母の方がアホです！ご主人様より断然アホです！はあ♥」

「じゃあとりあえずさっきのこと謝罪してもらおうかな？アホにアホって言われるのなんて僕だって心外だから♪」

「ああ！ごめんなさい！べんろお〜♪素子！アホのくせに則夫様にアホって言ってしまった

てごめんなさい！はああん！えろえろ！」

「はああん♥弓子も反省してます！ああ！ごめんなさい！ごめんなさい！ご主人様はアホじゃありません！おお！べんろお！ホントにアホなのは弓子と素子ですううう！」

「あはは！じゃあもつと自らのアホさをアピールしろ！アホになれ！完全完璧にアホになれ！まともな母親であることを完全に放棄して究極のアホになれ！そんなアホアホ人間の自己紹介だ！自分で自分をアホといえ！アホアホ人間である自分を胸を張って紹介してみろ！バッチリアホアホダブルピース強調して！それいけ！」

「はあっ！ああ、高嶋素子でええっす♪四十歳でええっす！わたくし、アホでええっす♥ああっ♥わたくし、アホアホ人間やってまあっす♪ああ、べろべろべろっ！高嶋素子